

授業終わりのことである。

メールにて呼び出しを食らった私は、サークル棟二階の「都市伝説研究会」に向かった。

「やあ。待っていたよ鷹市くん」

先輩はパイプ椅子にゆったりと座り、私を待ち構えていた。私は深く溜息をつき、心底、来なければ良かったと後悔した。そんな私の顔を見て、彼女はにやりと笑う。

「まあまあ、そんな顔せずに座りたまえ」

彼女に促され、渋々向かいのパイプ椅子に腰かける。

彼女の呼び出しなんて無視してさっさと帰ってしまえば良いのに。それは人としてありえないと、やけに善良なもう一人の私が窘める。

「ときに。人魚とは何だ？」

彼女は机の上に手を組み、その上に顎を乗せて聞く。彼女はこうして探偵……あるいは科学者のような口調で話すのだろう。彼女の言動にむず痒さを覚えながら答える。

「人魚って、上半身が人間で下半身が魚の、歌の上手い、架空の生き物ですよね」

私の回答に彼女は頷いた。

「その通り。それでは本題に入ろう。ずばり、豆井門の人魚について、だ」

彼女は自分の鞆からファイルを取り出し、その中身を私に差し出した。すなわち読めということなのだろう。私はホチキス留めされた書類を頂戴し、一頁ずつ目を通した。

「ここ豆井門大学は、かつて巨大な湖だった。何故かあまり知られていないけれどね」

頁をめくりながら彼女の話聞いてみると、豆井門地区の昔の様子に関する頁に目が留まった。

湖はちょうど大学の敷地と同じぐらいの大きさだった。しかし、何らかの気候変動か地殻変動かで干上がってしまった。一晩の奇妙な出来事だったそうだ。

湖の中身は埋め立てられ、その上に豆井門大学が建ったという。

「その湖に、人魚がいたという伝承がある。これも何故かあまり知られていない。これほど面白い話は他に無いだろうに、何故誰も興味を示さないのだろうね」

彼女は不満そうに口を尖らせた。

次の頁に移ると、彼女の言った人魚の伝承と

やらがまとめられていた。

恐らく彼女は夜な夜な、複数の書物から伝承を書き写したのだろう。私の記憶が正しければ、彼女は四年生だ。卒論や就職に追われる日々、どこにそんな暇があるのか。まさかこればかりやって、他に手をつけていないのだろうか。

やれやれと思いつながら伝承を追っていくと、ある疑問が浮かんでくる。

「……一ついいですか？ 人魚つて海水魚ですよね？ 湖に棲めるんでしょうか」

かの有名な映画「リトル・マーメイド」の挿入歌に「アンダー・ザ・シー」とあるくらいだ。人魚は海に棲んでいるはず。淡水である湖には棲めないのではないだろうか。

私の疑問に、彼女は溜息をついた。トントン、と自分の頭を指でさす仕草が小憎らしい。

「豆井門大学都市伝説研究会会則にも書いてあるだろう。都市伝説研究会の会員たるもの、先入観からの脱却を目指すべし、と」

実にしようもない会則である。所詮都市伝説研究会のくせに、いかにも高尚な理念を掲げているのが鼻につく。

「というか、私は会員じゃありません」

私が身を乗り出して言うと、常に冷静を装い

たがる彼女もさすがに怯んだようだった。ン、と咳払いをする。

「なに。心配しなくても、団体届にはしっかりとスキミの名前が書いてある。ほら見たまえ。稲生松里の下に、鷹市啓とあるじゃないか。スキミは立派な、豆井門大学都市伝説研究会の会員だ」
彼女は団体届の写しをひらひらさせた。

「望まない入会です」

忘れもしない四月六日のことである。ほんの少しでも、都市伝説に興味を持ってしまった私が悪かった。しかしそれ以上に、私の合意なく、強制的に入会させた彼女が悪いのだ。

「まあ。ここにスキミがいることが何よりの証拠だろう」

彼女はにんまりと笑う。勝った気になもなっているのだろうか。彼女の自信に溢れた顔に苛立ちを覚え、立ち上がって彼女を見下ろす。

「別に帰ったって良いんですよ」

やっぱり彼女の呼び出しなんか無視して、帰ってテレビでも見れば良かった。そう思いながら私が帰り支度をしようとすると、彼女は慌てた様子で引き留めた。

「悪かったよ。話だけでも聞いてくれないか」
しゅんとした顔の彼女は、心なしか子犬のよ

うに見えてくる。可哀想に思っ、私は仕方なくパイプ椅子に座った。彼女はほっとしたような表情を浮かべ、話を再開した。

「さて。そもそも人魚はギリシア神話に登場するセイレーンが元になっている。セイレーンは海の魔物だから、人魚も海の生物であると定義されるのは自然だ。

しかし面白いことに、実はローレライという川の人魚もいる。つまり淡水域の人魚はありえない話ではない。

湖に棲んでいたという豆井門の人魚は、その類だったかもしれない、という話だ」

彼女はぺらぺらと一気に話した。私はなんとか彼女の話を整理して飲み込んだ。

「つまり、豆井門の人魚はマーメイドの亜種のローレライの亜種……ということですか」

「おそらくね。ま、とにかく様々な可能性を考えたほうが、有意義で面白いということだ」

彼女は楽しげに語った。

「でも、湖はもう無いですよ？ さつき先輩が言っていた豆井門の人魚は、存在しない可能性のほうが高くないですか」

「豆井門地区はかつて湖だった。そこに人魚がいた……ということまでは把握できた。

しかし現在、こうして豆井門大学がある。いくら上半身が人間とはいえ、下半身は魚そのものなのだから、水がないと生きていけないはずだ。

「そこで、我ら豆井門大学都市伝説研究会の出版というわけだ」

彼女はパチンと指を鳴らした。そのいちいちカッコつける癖はどうにかならぬのだろうか。再びむず痒さを覚えながら首を傾げる。

「出版と言われましても、大学にある人魚のいそうな場所といえば、プールくらいじゃないですか。でも、プールに人魚がいたなんて話、聞いたことないですし」

仮にプールに人魚がいたら、あつという間に話題になり、新聞記者に取材班、オカルトマニアがこぞつてやって来るだろう。

豆井門の人魚は構内でも非常に知名度が低いようなので、プールにいるとは考えにくい。

かといって別の水場に移り住んだとは思えない。昔は巨大な水槽も、それを運ぶ車も無いはずだ。人ひとり分の体重に加えて、それが浸かるほどのたっぷりの水を運ぶことなんて、到底できないだろう。

「私もそんな話は聞いたことがないさ。けれど、

人魚は水中だけが棲みかではないだろうか？」
彼女はにやりと笑う。

「人魚姫のストーリーは知っているね」

「ええと、デイズニーのリトル・マーメイドはハッピーエンドですけど、原作であるアンデルセンの人魚姫は悲しい結末ですよ。王子に恋をしたけど、報われなくて、泡になって消えてしまったと」

私が答えると、彼女は頷いた。

「その通り。きみはどちらの結末が好みだ？」
彼女に聞かれて、少しの間考える。

「私は……やっぱり、ハッピーエンドがいいです。まあ、無理を言っただけ人間になった上に歌声まで取り戻すなんて、いささか虫が良すぎるような気がしますけど」

「それだよ。豆井門の人魚は愚かにも人間へと姿を変えた……と考えるのはどうだろう」

「まあ、ありえなくはないと思います」

私の反応に彼女は頷いた。それからホワイトボードに「豆井門の人魚大搜索SP」と書く。

「というわけで、人魚は人間として生きていると仮説を立てて調査していこう」

彼女はホワイトボードに仮説を書き加える。

「あの、豆井門で人魚を探すんですか？ もう

湖は無いし、大学が建っちゃってるし、この辺を調査しても見つからないと思うんですが」

私が質問すると、彼女は珍しく俯いた。つまらないこと聞いてしまったかな、と様子をうかがっている、彼女は顔を上げた。

「いるよ、きつと」。

それに、仮に一定の成果がなければ方針や調査方法、調査場所を変えれば良い。何事も、まずはやってみなければ始まらないだろう」

彼女はにこりと笑った。一瞬、表情に陰りが見られたのは気のせい。太陽が雲に隠れて室内が暗くなつたから、彼女の顔も暗く見えただけだろう。

こうして、「豆井門の人魚大搜索SP」が始まった。

数日後。

私たちは豆井門大学合唱部を見学することになった。人魚は歌が上手いから、合唱部やアカペラサークルを巡って行けば手掛かりがつかめるだろう、と思つてのことだった。

そんなにうまくいくだろうか、と不安に思いつながら、合唱部の演奏を聴く。彼女たちは、夏のコンクールに向けて既に準備を進めている

らしかった。

「なかなか上手いね。ま、人魚の歌声には劣ると思うが……」

「失礼なこと言わないでください」

先輩の足を軽く踏んで牽制する。

「わ、分かっているとも。私にだって、社交性の一つや二つあるのだから」

先輩は自信ありげに言った。普段の言動を振り返ると、先行きが不安でしかない。

「私たちの演奏、如何だったでしょうか」

演奏が一通り終わり、合唱部の部長が話しかけてくれた。ゆつたりとしていて艶のある仕草や表情は、さながら女神のようだった。

「とても素敵でした。質問なのですが、先ほどソロを担当されていたのはどなたですか」

先輩は、いつもの姿からは想像がつかないほど穏やかな口調で話していた。驚きで顎が外れてしまうところだった。慌てて口を閉じて会話を見守る。

「井莉友里恵さんです。あちらの、三つ編みの学生ですよ」

部長に案内され、井莉さんの元へ向かう。おそらく、先輩は彼女に目星を付けたのだろう。

「先ほどのソロには、圧倒されました。井莉さ

んは、どれくらい合唱をやっているのですか」先輩が話しかけると、井莉さんはびくりと肩を震わせた。

「わ、わたしは、そんな……合唱を始めたのは、大学に入ってから、です……」

井莉さんは小さな声で答える。学生たちが談笑している中で、彼女の声を聞き取るには、神経を集中させなければならなかった。

「大学から始めてあの上手さとは驚きです。中学や高校は何部だったんですか？」

先輩のような、次々と話を広げるタイプの人間に慣れていないのだろう。井莉さんはすっかり萎縮してしまった。それでも、何とか答えてくれた。

「えっと……中高では、部活やってなくて……習い事でピアノをやっていたから、伴奏担当で入ろうと思って……」

「なるほど。ありがとうございます」

先輩はにこりと微笑み、井莉さんから離れた。「なんかすみません。あの人、気になったことは全部知りがる人で」

先輩を前にしてガチガチに固まってしまった井莉さんをフォローしようと思いい、話しかける。井莉さんは緊張で顔が赤くなっていた。

「いえ……その……失礼があったら、ごめんなさい」

井莉さんが頭を下げたので、慌てて頭を上げてもらう。

「あの人、仮に失礼があっても気付かない人です。お時間いただいてすみませんでした。それじゃ、ありがとうございます」

私も井莉さんから離れ、先輩を追いかける。見学のパイプ椅子に着いた彼女は、顎の下に手を当てて考え込んでいた。

「何か気になることでもあったんですか」

珍しく大人しいので話しかけると、先輩は表情をぱっと変えた。

「いや、ね。古い友人に似ていたから、懐かしさを覚えてね」

「先輩にも友達とかいたんですね」

「きみ、私を舐めすぎじゃないか」

私の返答に彼女は口を尖らせた。

私たちは豆井門大学合唱部を後にし、豆井門会館から出る。続いて、アカペラサークル「唯」に向かった。

アカペラサークルはサークル棟で二番目に大きい部室を割り当てられている。都市伝説研

究会の部室の何倍くらいの広さだろうか。少なくとも、二倍以上はあるだろうか。

「お待ちしてました！ 今日見学の学生さんですね！」

きよろきよろしていると、サークル長らしき人と目が合った。

サークル長は元気が良く、すぐに見学席に案内してくれた。活動の様子を見てみると活気があり、私と先輩以外の部員が見当たらないような都市伝説研究会とは大違いだった。

しばらくすると演奏が始まった。アカペラサークルは合唱部とは異なり、流行りの「TOP」を歌うようだ。伴奏無しでここまで仕上がるのか、と思いながら演奏を聴く。

「悪くないが、合唱部のほうが好みだ」

「黙って聴けないんですか」

私は再び先輩の足を踏んで牽制する。

演奏が終わり談笑時間になると、先輩はすぐにサークル長の元へ飛んで行った。さつそく気になる部員を見つけたのだろう。

「どれも素敵な演奏でした。質問なのですが、右から三番目の学生さんはどなたですか」

「ああ、其田真子ちゃんですね。今年入ったばかりだけど、すごく上手なんですよ」

サークル長は素直な人で、後輩のこともほとんどん褒めて伸ばすようだ。回りくどい言い方ばかりする、ひねくれものの先輩は是非見習ってほしいものである。

「こんにちは、其田真子さんですか」

「え、そうですけど。何ですか……?」

先輩に話しかけられた其田さんは怪訝な顔をした。先輩のことを怪しい人物だと思っっているようだ。その通りである。

「いえ。いきなり話しかけてすみません。先ほどの演奏で、あなたの歌声が一番素敵だったので、それを伝えたくて……」

先輩が控えめに微笑むと、其田さんの警戒が少しだけ解けた。

「え、ああ……ありがとうございます。でも、私なんてまだまだですよ。もう引退しちゃった四年の明日香先輩が一番上手ですから」

「明日香先輩は、どんな人なんですか?」

先輩が聞くと、其田さんは目を輝かせて語る。「明日香先輩は音楽専修で、歌を歌うのも、ピアノを弾くのも、歌を教えるのも何もかも上手なんです。私は新歓祭で明日香先輩の歌を聞いて、このサークルに入ったんですよ」

「どうやら明日香先輩は相当凄い人で、彼女の

憧れの人らしい。

「そうなんです。ね。ぜひその歌声を聞いてみたいものです」

先輩は明日香先輩が引退したことを残念がった。

先輩は音楽に興味があるとは思えない。先輩の言葉や表情はすべて、相手を懐柔するためのものなのだろう。部室でも今みたいに、普通に喋ればいいのに。どうしてあんなわざとらしい、むず痒い喋り方しかしないのだろう。

しばらく見ていると、会話を終えた先輩が私の元に戻ってきた。

「次の狙いは音楽専修で決まりだ」

「音楽専修に忍び込むってことですか? 私たち教育学部じゃないから、絶対つまみ出されちゃいますよ」

私は人文社会科学部現代社会学科で、先輩は記憶が正しければ理学部生物学科だ。教育学部とは縁がない。私たちには教育学部の友だちなんていないし、研究会の会員にも教育学部生はいない。

「そりゃあコソコソしていたら怪しまれてつまみ出されるのは当然だろう。だから堂々と忍び込み、溶け込むんだ」

先輩はそう言ってアカペラサークルを後にする。私もその後が続いた。

その後。数日かけて豆井門大学混声合唱部、弾き語りサークル、軽音部を五つはしごし、様々なジャンルの音楽にどっぷり浸かった私たちは、部室に戻ってきた。

「さて。作戦会議といこうか。とはいえ、やることは決まっている」

「それじゃあ作戦発表会じゃないですか」

「はあ。それでは作戦発表会に名前を改めよう」

彼女はホワイトボードに書いた文字を訂正する。音楽に触れたことで、以前よりは多少素直になったような気がする。彼女に足りなかったのは、うつくしいものを楽しむ心だったのだ。「まず、先日話した通り、次は音楽専修に焦点を当てる。そこで、きみには音楽専修の授業を受講してもらいたい。これが授業一覧だ」

彼女は私に教育学部の授業一覧表を渡した。めくっていくと音楽専修の授業がまとめられた頁がある。授業名だけで内容がぼんやりと想像できるものと、できないものがあつた。

「どれを受講するかは任せるが、なるべく歌唱力が分かる授業を受講してほしい」

「となると、この独唱Ⅰの授業とかでしょうか」
「そうだね。概論などの教育学部チックな授業は、あらかじめ外してしまうのが良さそうだし、とりあえず歌を歌いそうな授業にマーカーを引いていく。」

「先輩は何をするんですか？ まさか私にだけ調査を押し付けて、先輩は椅子にふんぞり返るだけ……なんてことはないですよ？」

「もちろん。私は引き続き大学構内で調査を行う。先輩の調査結果を待っているだけだなんて、そんな犬みたいなことほしくないさ」

冗談のつもりだったが、彼女はいたって真面目に返答した。私は気まぎれな口を噤む。

「ま、きみには期待しているよ。豆井門大学都市伝説研究会の会員であり、私の優秀な後輩だからね」

彼女はボンと私の肩を叩いた。私は溜息をつきながらその手を払いのける。

「別に、先輩のために調査してるわけじゃないですから。私も知りたくなってきましたし……」

「え？ よく聞こえないなア」

にたりと笑いながら迫る彼女をすり抜け、部室を後にした。

翌日。

さつそく私は教育学部C棟に侵入し、音楽専修の授業受講を試みた。三〇四教室に恐る恐る入ると、なんと井莉さんがいた。

「……あれ、この前の……?」

井莉さんは私を見て首を傾げる。無理もない。私は音楽専修どころか、教育学部ですらないのだ。このままでは作戦失敗だ。先輩に何て言おう、とその場に立ち尽くしていると、彼女は手招きしてくれた。

「こ、この授業……先生が日替わりだし、点呼はとらないから、いても大丈夫だと思います」
彼女は優しく微笑む。合唱部のときよりも自然な感じだった。

「あ、ありがとうございます」

私はありがたく彼女の隣に着席する。

「えつと……その、名前、聞いてもいいですか? この前、聞きそびれてしまつて……」

「え? ああ。タカイチハジメです。鳥の鷹に、なんとか市の市に、啓発の啓で、鷹市啓」

学生証を財布から取り出して見せる。自分の名前をまじまじと見られて、少し緊張した。

「はじめ、さん。素敵な名前ですね」

素敵な名前と言われた経験が無かつたため、

少し照れてしまう。

「えつと、タメ口でいいよ。井莉さんも一年だよね?」

井莉さんはこくりと頷く。

「う、うん。その……はじめさんは、どうしてここに?」

一番答えにくい質問を投げかけられて怯む。どう答えても不審者の烙印を押されるだけだろう。

「え、ああ……なんというか……」

「あ、その、答えたくないことだったら、答えなくて大丈夫だから……」

彼女の氣遣いが胸に刺さる。こんなに善良な彼女に嘘をつくのは罰当たりだと、もう一人の私が窘める。しかし、人魚を探しているなんて言ったら何かしらの疾患を疑われてしまうだろう。

「その、調べものをして。それに音楽が必要だから……色々聴いて回ってるんだ」

「調べもの……?」

彼女は首を傾げた。人魚という情報を濁そうとしても、最終的に人魚にぶち当たる。彼女になら話しても良い気もするが、話せるほど親交はない。

「えっと……あ、この後暇？ 大学前のファミレスで話そう」

この授業が終わればちょうどお昼時である。昼食を取りながら仲を深め、その後話したほうが自然だろう。

「う、うん。……あ、先生来たみたい」

教授らしい人がやって来て、私たちの会話は一時中断した。

授業終わり。

実にひどい目に遭った。音楽専修でなくても聴講できたのは良かったが、まさか私まで歌わされるとは思わなかった。最後に歌ったのは中学生のときだ。おまけに、カラオケなんて滅多に行かないほどである。

おかげで歌っている最中もその後も気が気でなく、私の後に歌った学生の歌声も顔も、何も思いつけない。

溜息をつきながらようやくC棟を出る。空気がいつもより三倍ほど新鮮に感じられた。

「た、大変だったね……でも、すごく綺麗だったよ」

「あ、ありがとう」

彼女の歌の方がずっと上手いだろうに、彼女

は私のことを褒めてくれた。それが嬉しくもあり、恥ずかしくもあって、何とも言えない気持ちになる。

私たちはそのまま大学前のファミレスへ向かった。店員に案内され、ソファに腰かける。メニューを取り出して見たが、大勢の前で歌ったストレスで、あまり食べる気にはなれない。

「はじめさんは、何食べる？」

「うーん、パスタかな」

パスタならある程度喉を通るかもしれないと思い、ほうれん草とベーコンのパスタを注文する。彼女はオムライスを注文した。それぞれセットのドリンクバーも付けた。私はミルクティーが飲みたい気分だった。

「井莉さんは何飲む？」

「あ、じゃあ……カフェオレで」

ミルクティーとカフェオレをそれぞれマグカップに注ぐ。席に戻り、彼女にカフェオレの入ったマグカップを渡した。

「ありがとう。それで、さっきの……調べものこと、聞いても良いかな……？」

ミルクティーを一口飲み、頷いた。

「私、都市伝説研究会っていうのに入ってる。先輩と一緒に、人魚を探してるんだ」

「人魚って……豆井門の」

返って来たのは予想外の反応だった。豆井門の人魚は何故かあまり知られていないと先輩は言っていたが。どうやら彼女は聞き覚えがあるようだ。

「知ってるの？　もし何か知ってたら、教えてほしい」

私が聞くと、彼女は頷いた。

「知ってるって程じゃないけど……おばあちゃん、むかし話してくれたことがあって」

「どれくらい前か、分かる？」

「わたしが小学生くらいとき……かな。もう、おばあちゃんは亡くなったから、詳しい話は聞けないんだけど……ごめんね」

「全然。豆井門の人魚のこと、少しでも知っている人がいて良かったよ」

しばらくすると、注文した料理がやってきた。オムライスとパスタをそれぞれ受け取り、スプーンを彼女に渡す。

「それで、もし覚えてることがあったら聞きたいんだけど」

「えっとね……豆井門の人魚はうつくしいことと有名で。顔だけじゃなくて、鱗が特にうつくしくて。お金持ちの人が、鱗目当てでござ

て求婚したの。でも、そんな心の汚い人じゃないって、心の清らかな、村の青年と恋に落ちただって。

それで、神様に願いつけて人間になった人魚は、青年と一緒に別の場所に移り住んだ……って、聞いたよ」

先輩からもらった資料には、そんな結末は書いていなかった。私はこれをどう処理したら良いか分からず、とりあえず先輩にメールすることにした。

「……ありがとう。調査の手掛かりになるかもしれない」

私がそう言うと、彼女はほっとしたような表情を浮かべた。

「あ……冷めないうちに食べちゃおうか」

彼女に言われて慌てて食べ始める。パスタは若干ぬるくなっていたが、猫舌の私にはちょうど良い温度だった。

その後解散し、私は急いで部室に向かう。扉を開けると、先輩が待ち構えていた。

「やあ鷹市くん。先ほどはメールありがとう」

「いえ」

荷物を置いてパイプ椅子に座ると、彼女が言

った。

「優秀なきみなら気が付いたと思うが、きみが井苺友里恵から聞いた話は、伝承のどこにも書いていない」

彼女の言う通り、井苺さんから聞いた話は、彼女がまとめた資料には書かれていなかった。「だとすると、井苺さんのおばあちゃんの作り話か、井苺さんの記憶違いか、あえて記録されなかったのか……先輩はどれだと思います？」

「きみはどれが一番面白いと思う？」

質問を質問で返すなよ、と思いながら、三つの可能性をそれぞれ想像する。

「……あえて記録されなかったと仮定すると、なぜ記録されなかったのか疑問です。追いかけるなら、この説が面白いかと」

私が答えると、彼女はにんまりと笑った。「さすが、私の見込んだ豆井門大学都市伝説研究会の会員だ」

全く嬉しくない褒め言葉だった。

「では、きみは井苺友里恵からさらに詳しい話を聞いてくれ」

「詳しい話を持って言われても、おばあさんはもう亡くなったと聞きましたよ」

それにこれ以上深堀りしても、井苺さんに迷

惑をかけるだけだろう。

「孫が知っているくらいだ。井苺友里恵の母か父かは分からないが、おばあさんの子どもなら耳にたこができるくらい聞かされているかもしれないだろう」

彼女がそう言うて目を細めるのを見て、これから私に与えられる役割を想像する。

「……井苺さんの実家に行け、と」

「ハハハ！ それができたら一番良いけれど、いささかハードルが高いだろう。間接的に話を聞いてもらえれば及第点だ」

につこりと笑う彼女を見て、私は深く溜息をついた。

「それでは、引き続き音楽専修への潜入調査も合わせて進めてくれたまえ。解散」

私たちは部室を施錠し、サークル棟から出た。

翌日。

私は再び教育学部C棟に来ていた。教室にはまだ入らず、一階の出入り口近くで井苺さんを待つ。

というのも、この前ファミレスで話を聞いた時に、連絡先を交換するのを失念していたのだ。こうして待ち構えるのはやや不審者感が増す

が、仕方のないことである。

しばらく待つっていると、井莉さんらしき人が入ってきた。

「あ……はじめさん。どうしたの……？」

「潜入調査と……あと、井莉さんのメアドが知りたくて」

「えっ、わ、わたしの……？」

いきなり連絡先を聞くのは、やはり怪しかつただろうか。無理なら大丈夫、とその場を離れようとすると、彼女は慌てて鞆からケータイを取り出した。猫のストラップがジャラジャラとついている、白いケータイだった。

「えっと、これ、です。で、電話番号もどうぞ」

彼女が画面に表示してくれたメアドと電話番号を登録する。

「ありがとう」

「い、いえ……！ あ、それと……今から授業に行くところだったよね……？」

腕時計を見ると、あと五分ほどで目当ての授業が始まる場所だった。

「そうだけど、もしかしてまずい？」

首を傾げると、彼女はこくりと頷いた。

「う、うん……次の授業は点呼も取られるし……ルールとか結構厳しい先生だから」

止めておいたほうがいいと言われ、うーんと唸る。やはり現実的に考えて、潜入調査は無理なのだろうか。私が考え込んでいると、彼女は私の手を握って言った。

「わ、わたしで良ければ、調査するよ……！！」

「本当？ すごく助かる……！！」

彼女の手を握り返すと、彼女は慌てて手を離し、目を逸らした。さすがに距離が近すぎたかと思い、私も慌てて手を背中側に引っ込めた。

「え、えっと……歌が上手な人を探して、はじめさんに言えば良いんだよね？」

「うん。お願いしても良いかな」

彼女はこくこくと頷いた。これで潜入調査を彼女に代行できる。いきなり歌わされることもない。

彼女に何度も頭を下げ、授業終わりに教育学部棟のラウンジで落ち合う予定を取り付けた。

授業終わりの鐘が鳴り、もうそんな時間かと顔を上げる。昨日の帰りに図書館で借りた、豆井門地区の歴史についての本を読んでいたところだった。

「お、おまたせ……！！」

井莉さんは走ってここまで来たようで、顔を

真つ赤にして息を切らしていた。

「全然待ってないよ。それより、大丈夫？」

待っている間に自販機で買った麦茶を彼女に差し出す。

「え、そんな、悪いよ」

「調査料だから」

ね、と念を押すと、彼女は申し訳なさそうに麦茶を受け取った。

「それで、どんな感じだった？」

私が質問すると、彼女はノートを取り出した。学生一人一人の歌声やその特徴をまとめてくれたらしい。

「えっと……特に気になる人はいなかったかな……あ、もちろん皆上手なだけ……！」

その、人魚の歌声はもともとと凄いと思うの」

「確かに、歌声で人を惑わせられるくらいだからね。けど、それくらい上手い人ってなかなかいないよねえ」

そもそも所詮都市伝説なのだから、人魚なんて九分九厘いないだろう。けれど、こうして伝承として細かく残っていると、いる可能性に賭けたくなってしまう。

「……そうだ。井莉さんに調べてもらいたいことがあって」

授業終わりに落ち合ったのはこれが目的である。井莉さんは首を傾げた。

「できたら、井莉さんの親御さんに、人魚のことを聞きたいんだ」

「わたしの親に……？」

私は頷く。

「井莉さんのおばあさんが、井莉さんのお父さんかお母さんに人魚のことを話してるんじゃないか、って思ったんだ」

「確かに、聞いてみる価値あると思う……！」

井莉さんはやる気満々のようで、さっそく親御さんに連絡を入れてくれた。

「それじゃあ、今日話したいことはこれくらいかな。親御さんから返信あったら、メールか電話してくれると助かるよ」

井莉さんはこくりと頷いた。

正直、私と先輩だけでは調査の範囲が狭く、情報が掴みにくかった。井莉さんが協力的で良かった、と安堵する。

井莉さんはこの後用事があるようで、私たちは解散した。

連休初日。私は大学近くのバス停で井荻さんを待っていた。

というのも、なんと井荻さんの実家に行くことになったのである。先輩に巻き込まれると碌なことにならないが、調査に関することについては何もかもがうまくいってしまう。先輩の何がそうさせているのか分からず、考えれば考えるほど謎に包まれていく。かといって、偶然にしては都合が良すぎる。

私は頭を振って考えることを止め、井荻さん待った。

「おまたせっ……！」

井荻さんは走って来たようで、顔を真っ赤にして息を切らしていた。きつとこうなるだろうと思っていたので、来る途中に買っておいいた麦茶を差し出す。

「バスはまだ来ないから、全然大丈夫」

「え、あっ……ありがとう……」

彼女は麦茶をゴクゴクと飲み、ぷはあと息を吐いた。

彼女の地元は電車で一時間のところにあるらしい。遠方からここにやって来た身からすると、実家が電車で一時間の圏内にあるのは、羨ましい限りである。

やって来たバスに乗り込み、駅へ向かう。二十分ほど揺られると駅に着いた。

「人、凄いね」

「連休初日だもんね……」

駅は人で溢れており、沖縄物産展なんかも開催されていて、非常に賑やかだった。

券売機で切符を買い、改札を抜けてホームに出る。彼女の地元である三輪木行きの電車に乗り込み、ボックス席に向かい合って座った。先ほどとは異なり、この電車に乗っている人は少なかった。

「はじめさん、お菓子食べる……？　いろいろ持ってきたんだ」

彼女は猫がプリントされた鞆からお菓子を次々と取り出した。

「いいの？　じゃがりこがいいな」

彼女からじゃがりこを受け取る。塩気と硬さが非常に好みなのだ。

「はじめさんって、しょっぱいのが好きなんだ」
「うん。お菓子も、甘いのはしょっぱいのばかり食べちゃうな」

彼女はチョコレートやクッキーなどが好きらしい。アルフォートのファミリーパックを開けると、一人で黙々と食べ始めた。

「え、あ……わたし、お菓子が大好きで……！
み、みっともなくでごめんね」

「全然そんなことないよ。井莉さんが食べてる
の、一生見てられるし」

「え、え……！」

どうやら困らせてしまったようで、彼女は顔
を真っ赤にしたまま俯いていた。

いつの間にか寝てしまったようだ。三輪木駅
で井莉さんに起こされ、慌てて電車を降りる。
三輪木駅は豆井門とは異なり、静かで穏やかな
場所だった。

「マ……お、お母さんがロータリーで待ってる
みたい」

改札を抜けて駅前のロータリーに向かう。私
は緊張してしまって、錆びたロボットのような
歩き方になっていた。

彼女の母親は赤い軽自動車に乗っているら
しい。ロータリーに出るとすぐに分かった。

「ただいま」

「おかえり友里恵ちゃん。それから、あなたが
啓ちゃんね」

井莉さんとその母親は顔がよく似ていて、笑
うときにできる目尻のシワまで同じだった。

「お世話になります」

私が深く頭を下げると、そういうの良いわよ、
と恥ずかしそうに笑った。私はあるがたく車に
乗せてもらった。

「豆井門の人魚の話、母さんがたまに話してく
れたの。もうすっかり覚えてないけどねえ」

井莉さんの母親——美津子さんはそう言っ
て、懐かしそうな顔をした。

三輪木駅から車で数十分走ったところに、井
莉さんの実家があった。井莉さんの実家は二階
建てで、赤いレンガの屋根が特徴的だった。絵
本に出てくるような、綺麗に整えられた庭があ
り、白い薔薇が咲いていた。

「凄……」

私がぼろっと口に出すと、美津子さんは嬉し
そうに笑った。

「この庭、パパが張り切って整えたの。友里恵
ちゃんのお友達が来るぞって、電話があつてか
らはしゃぎっぱなしで」

「も、もう。恥ずかしいから止めてよ……！」

井莉さんは顔を赤くして言った。

車を降りて家に上がらせてもらう。井莉さん
の部屋に荷物を置かせてもらい、その後洗面所
で手を洗った。

「井莉さんち、凄く綺麗だね」

「お父さんが綺麗好きで……わたしの部屋まで掃除しようとするのは、嫌だけど」

洗面所を出てリビングに入ると、テーブルに紅茶とケーキが用意されていた。

「おお、キミが啓ちゃんか」

どうやら紅茶とケーキを用意してくれたのは彼女の父親——喜代治さんらしい。喜代治さんは赤いギンガムチェックのエプロンに身を包み、ピンクのミトンを手にかけていた。ファッションシーな姿に圧倒されていると、井莉さんは叫んだ。

「もう！ 恥ずかしいから、そのエプロン着るの止めてって言ってるじゃん！」

いつもの彼女からは想像できない声量に驚く。喜代治さんは子犬のようにしよげて、エプロンを脱いだ。

「け、ケーキ焼いてくれたのはありがとう……」

あまりにしよげるのを見かねてか、井莉さんが小さな声で言う。すると、喜代治さんの顔が一気に明るくなった。

「構わないよ。友里恵ちゃんと、そのお友達のためなら何個でも焼くさ……！」

喜代治さんはミュージカル俳優のように高

らかに歌い上げ、そのままリビングを出ていった。賑やかな人だと思う。

「ご、ごめんね……！ パ……お父さんは何でもできて凄いんだけど、すごい変な人で」

「ううん。こんなに歓迎してもらえて嬉しいよ」
私がそう言うと、井莉さんはほっとしたように笑った。

喜代治さんの焼いた林檎のケーキは店のどんなケーキよりも美味しかった。あまり甘いものを食べない私も、あつという間に完食してしまった。井莉さんにまだまだあるよと言われ、ありがたく二切れ目を頂戴する。

「友里恵ちゃん。おばあちゃんのアルバムとか出しておいたから、後で好きに見ていいわよ」

美津子さんはそう言い残して、喜代治さんとどこかに出かけたようだった。

「ありがとうママ……あ」

「……普段はパパママって呼んでるの？」

顔を赤くして恥ずかしがる彼女は、小さく頷いた。どうやら、子どもっぽいと思われたなかったようだ。気にしなくて良いのに、と思うたが、本人は恥ずかしくてたまらないのだろう。私はそれ以上触れないようにした。

ケーキですっかりお腹いっぱいになってしまった私たちは、井莉さんの部屋に向かった。井莉さんのおばあさんの遺品であるアルバムが数冊、白いミニテーブルの上に置かれていた。「人魚の手掛かりがあれば良いんだけど……」彼女はそう言いながら一冊目をめくった。写真の横にメモ書きがあり、日付と出来事などが細かくまとめられていた。

「小さい頃のおばあさんも、井莉さんそっくりだね」

「よく言われるの。おばあちゃんも、お母さんも、私も、すごく似てるから……親戚に会うとびっくりされるんだ」

彼女は恥ずかしそうに笑った。私は母親にも父親にもあまり似ていないので、なんだか羨ましく感じた。

「あ、おばあちゃんのお兄ちゃんって、豆井門大学だったんだ……」

頁をめくると、若い頃のおばあさんと、少し背の高い男性が、入学式の看板と一緒に写っていた。

「当時大学に通えた人って、すごいお金持ちの人か、すごく頭の良い人だね？」

「多分そうだと思う……すごいね」

私は頷いた。

「あ、若い頃のおばあちゃんとおじいちゃんだ」井莉さんのおじいさんは酷く緊張していて、顔が強張っていた。メモ書きにも緊張しているところ。その横ではおばあさんは困ったように笑っていた。

「写真を撮られるのが苦手だったのかな……」

「かもね」

その後も談笑しながらめくっていった。

数冊あったアルバムも、すっかり最後の一冊になった。午後五時のチャイムが外から聞こえ、もうそんな時間かと窓を見る。

「で、電気着けようか」

井莉さんはドアの近くにあるスイッチを押した。

「ありがとう。……ん？」

視界にキラキラしたものがちらついたような気がして、アルバムの頁をめくる。すると、一枚の青い封筒が挟まれていた。キラキラ光っていたのは、透明な、鱗のようなものが貼り付けられていたからだろう。

「封筒？」

「きらきらして、綺麗だね……」

頷きながら封筒を裏返すと、「睦子へ」と書かれていた。

「おばあちゃん宛ての手紙……みたいだね」

「……中、見てみよう」

封筒から出てきたのは手紙と、一枚の写真だった。

「この人……」

井莉さんと一緒に、一枚の写真を食い入るように見つめた。

写真に写っていたのは、三十代前後であろうおばあさんと、先輩そっくりの女性だった。手紙には「お元気で 松里より」とだけ書かれている。

「松里、って」

手紙を持つ手が震えた。この数日間、資料で嫌というほど見た、先輩の筆跡そのものだった。

数日後。

都市伝説研究会の部室に行くと、先輩が窓の方を向いて座っていた。私が向かいのパイプ椅子に腰かけると、先輩は私を見た。

「メールありがとう。待っていたよ」

先輩の表情は、いたっていつも通りだった。

「……豆井門の人魚は、本当に先輩なんですか」

私が聞くと、先輩はゆっくりと頷いた。私はまだ信じきれなくて、唇を震わせた。

「ああ」

彼女は肯定した。

同じ顔をした人は三人いるらしい。ドッペルゲンガー現象というもので、昔何かの本で読んだ覚えがある。つまり写真に写っていたのは先輩によく似た、しかも同名の人かもしれない。

あるいは、先輩はタイムマシンを完成させていて、私を驚かせるために過去に行き、井莉さんのおばあさんに接触したのかもしれない。

私は様々な可能性を示してみたが、先輩は首を横に振るばかりだった。

「ああ、また私をからかっているんだ。もう、その手には乗りませんから」

私が顔を引きつらせて笑うと、彼女は私を諭すように言った。

「私はずまらない嘘はつかないよ」

それきり、私は何も言えなくなってしまうた。

「はじめに……悪かったね。この都市伝説は答えのある都市伝説だった。きみは心底ガツカリしただろう。巻き込んで悪かったね。」

それから。付き合ってくれてありがとう。これほど面白い人と同じ時を過ごしたのは久しぶりだ。この数週間、楽しかったよ」

彼女は目を細めた。

「……人間になれば、ヒトと同じ時間を生きられると思っただ。けれど違った。私は歌声も、うつくしさも、ヒレも鱗も失い……永遠だけが残った。一番望んでいなかったものさ」

実に愚かだ、と彼女は呟く。

「村の青年と恋に落ちたと聞いただろう。それは半分正しくて……半分間違いだ。」

確かに私は村の青年を愛していた。湖が干上がったとき、私を引き上げて、ドラム缶いっぱいの水を用意してくれたのは彼だ。私が人間となった後も、変わらず一緒にいてくれた。

けれど……それ以上に、その妹——睦子がいとおしかった。睦子はきれいで、歌が上手で、うつくしいものをうつくしいと言う。素直で純粋な彼女が、いとおしくてたまらなかった。

しかし、睦子には睦子の愛する人がいたんだ。当然、私はすぐに身を引いた。だが、私は愚かで強欲で、哀れなものでね。忘れてほしくなくて……あの手紙を送っただ」

彼女は小さく縮こまり、ぽつぽつと話した。

ときどき鼻をすする音がした。

「豆井門の人魚の全容はきみの手によって明かされた。これにて調査はお終いだね」

彼女は立ち上がり、帰り支度をした。

「……で、どこ、行くんですか」

「そろそろ豆井門から出ようと思っただね。この部室は自由に使いたまえ。都市伝説研究会も、続けようが続けまいが構わない」

「違くて……!! 独りでどこ行くんですか! まさか私を残して行くんですか!!」

「え、え?」

「散々付き合わせて、用済みになればポイですか?! 長命種はみーんなそうなんですかね!!」

私は彼女に詰め寄った。

「……永遠って、想像もつかないけど……きつと怖いけど……二人なら、怖くないじゃないですか」

私はそう言って彼女を見つめた。彼女は戸惑っていたが、賢いので理解したのである。

「……驚いた」

人魚の血は甘く、しよっぱかった。